

著者抜粋詩（秀作集）

蛾城

また夜明けの訪れ、既に幾日、眠りの無い日々が訪れ去っただろうか、と記憶を手繰る、あの青い静脈の、透けて見える太陽がまた、風船のように昇つてくるかと思うと、ぞつとするから、私は耳穴を塞いで、頭蓋に反響する、遠い日の唄の残骸を捜していたり、それに腐心すると瞼を閉じて、暗黒の空間を独り散策する、と恐らくは遙か意識の彼方に、微かな光の地点が発見される、或いは蜃気楼か、と双眼鏡を目に当てれば、そいつは城郭なのだ、近づこうとして歩いたら、何ヶ月もの時間が経ったが、城門に立ったとき、私はもう城郭の中に居た、ロジネスな空が在って、シラスを耕した畑には、デリケートな植物を栽培する男が居て、尋ねるとそれを、猜疑心と名付けたり、更に聴いていると、第六日曜日に礼拝堂へ押し掛けてくる二日酔いの女が居て、この生命たちに南方の毒液を注いでゆくのだと嘆いたが、その美しい仕事の価値を知らない者を、私はひどく哀れに感じた、冷たい春の午後だった、塔のてっぺんで、盗聴器が光った、なぜにパラノイアは発狂したか、という稚拙な条理に対して、私は今日的には、非常に冷淡である、それが応答でもあるが、とにかく全く水が不足していて、言語までが風化されてゆく。

難破船の還る日

いつ喪くしたのかも忘れてしまった追憶公園の
プラタナスが噪ぐ究極の秋空の碧い眼底から
もうすっかり忘却していた難破船が
じつは予定通りに還ってくる日が遂に
やってくるのだもうじき

あの遊び疲れた公園の友達と

夕食を告げにくる妹たちの
家で待つ祖母や父母

みんなが連れて行かれたあの日
一人佇んで呆然といつまでも待ち続けた長い夜
あれから太陽はどれくらい廻ったのだろうか
すべては夢だった途方もなく長い旅をした

ブランコは囁く

漕いでも漕いでも届かない夢を

滑り台は呟く

降りても降りてもまた昇れと

砂場は嘯（うそぶ）く

掘っても掘っても未来は見えないよと

それでも友達より多く遊ばなくては大人になれない
どうしてそんなに大人にならなくてはいけないのだ
子供のまんまで逝った「新聞少年」は
回旋塔にぶら下がったまんま寂しく問いかけ消えた
そうすべては難破船の還る日のために
誰もがこうやって辛い旅をしなくてはならないのだ
積み忘れたおまえを屹度迎えにくるから
あの胎内で耳にした麻断の音階とともに
ああ陶酔の馥郁たる腐臭を漂わせ
ほら乳色の蜃気楼の彼方から
もうじき難破船が還るよ

注…中二の冬新聞配達中に
交通事故で夭折した級友高橋邦夫君の魂に捧ぐ。

血だらけの花園

すべての花は凶器を自らに突きつけている
季節は七月屋上遊園の回転木馬から
痺れやかな音楽が流れてくる日
マネキン人形は悉く自爆して
ぬめぬめした内臓を露出して羅列する

花畑は血にまみれた謝肉祭
のたうつ心臓総ゆる街辻に配置され
回収し難い真昼の見物渋滞
片づけ忘れた未消化の性欲が
再びこの軀に真紅の花粉を噴霧するか
その限り凶器はすべての花弁に突き刺さっている
やがて花園は血に喘ぎ呻吟するだろう
またしても終了しない祭儀が始まったのだから

渚の記憶

地球の朝が始まった渚
夢も希望も未来も忘れて
真空のときに浸る瞬間
心の揺らぎは砂浜にさざ波を巡らす
そんな朝もあったね
まだ新しい体を洗う
二人で恥じらう花園の余韻
このまま地球が減びても
何の悔いもないと君は呟いた
あああれから何回夏は過ぎたのか
すっかり忘れてしまった
人は自分を隠して死に地を探す
単調な日日の繰り返しに忘れる
瑞瑞しいあの瞬間を
もう一度渚に還れ！
まだ渚がそのままであれば
だがおまえは変わってしまった
おまえが変われば渚も変わる
それでもいい
せめて渚の記憶に戻れば
天空を廻っていたおまえも降りる
至福のときがわたしを包む
そしてこの世は終る

最期の夏

薔薇が馨る夜

ある日空からエンジェルへアーと見紛うあたたかい雪が降った
誰もが踊りながら飛び出したら10年後にはみな死んだ
よい目にあうと滅びが早いエンジェルダストはよがりの毒だと
邪教の医師団は耳打ちして絶えたそれから春が来ると体が溶けたい
でも交接の後の悔恨は辛いよ息をしよう窓を開けたらああ薔薇が馨る夜

月の笑う晩舟は出る（挿し込み歌・曲あり）

たれかおしへてください どのみなとから ふねはでるの
たれかおしへてください ぼくものれますか そのふねに
たれかこたへてください つきのわらふばん ふねはでる
どこかのみなとから どこかのせかひへ ふねはでる

たれかかへしてください あしたといふひを ぼくのてに
たれかかへしてください けれどももうおそひ ふねはでる
たれかさけんてください つきのわらふばん ふねはでる
どこかのみなとから どこかのせかひへ ふねはでる

みんなうたはてください ぼくがうれしそふに てほふるとき
みんなうたはてください ぼくがかなしそふに てほふるとき
たれかつたへてください にどとかへらない ふねのこと
ぼくのちちやははに どふかゆるして くださいと

（1970年20歳時制作）